

「コシ」という国名

木村 紀子*

要 旨

本稿は、古代、広く北陸地域を指して呼称されていたと見られる「コシ」という国名についての、意味論的考察である。

「コシ」という呼称の持つ「ニユアンス」は、その語の出る古事記・日本書紀・出雲国風土記等で、必ずしも均一というわけではない。それらの断片的な記述からほの見える、往古の大国「コシ」のイメージを、以下の「目次」に沿って辿りながら、太古のその地の人々自らが呼称した「コシ」の本義を探り、文献以前の列島の言葉の一端を明らかにしたい。

- 一 「洲国」産生神話の中の「コシ」
- 二 神話期の出雲と「コシ」（高志）
- 三 ヤマト政権と「コシ」（越）
- 四 「コシ」の本義

一 「洲国」産生神話の中の「コシ」

古事記・日本書紀冒頭部に語り記される国土生成（記）・洲国産生

（紀）神話は、神話のないわゆる荒唐無稽さともかくとして、それぞれ周到な配慮で文字言語化されたといつにしては、すんなりとは納得しがたいいくつかの疑問点を持つている。まずは、古事記の場合、イザナギ・イザナミの男女二神が、共に、「国土生成」を為そうと契つて、生み続ける「国土」とは、淡道嶋あはぢしまに始まり、伊予の二名の嶋・隠伎の三つ子の嶋・筑紫嶋・伊伎嶋・津嶋・佐度嶋、そして大倭豊秋津嶋おほやまとあきつしまと生み進め、

此の八嶋を先に生めるに因りて、大八嶋国おほやしまくにと謂ふ。

と、一段落したとする。そして、「然る後、還り坐す時」にあたり、吉備児嶋・小豆嶋・大嶋・女嶋・知訶嶋・両児嶋を生み、そこで、「既に国を生み竟て」ということで、次は、神々を生むという段取りとなっている。

クニ（国）を「生み成す・生み竟る」といいながら、実際次々に生まれてゆくのはシマ（嶋）と呼ばれ、それらの嶋を束ねて「大八嶋」国と総称したといっているのかと思えば、実は、伊予の二名嶋は、「身

一つにして面四つ有りて、面毎に名有り」として、伊予国・讃岐国・粟国・土左国を挙げ、筑紫嶋も同様に、筑紫国・豊国・肥国・熊首国の四面が有るといふ。ここでは、国(クニ)は嶋(シマ)のいわば内分けの呼称のようでもある。

クニという語の指す意味は、現代語でも「日本の国」と国家を言う場合と、「おくに、訛り」などと郷里を言う場合があるが、神話の語られた初発から、漠然とそうした広狭重複した用法があつたというわけではないだろう。他方、シマの方は、「アキツシマ、やまと・シキシマのやまと」等の言い方からしても、嶋(島)の字義から直接とらえられるような海中の島嶼といった地理的な意味でなく、むしろクニと似た意味の、特定の人々が群れをなし共住する領域を言ったのではないかと思われる。シマもまた、区域・村落といった意味合いの用法を江戸期の文献等に残している。

ところで、島々の生まれた順序に目をとめると、淡道嶋を起点に、海上を船で四国を巡り、関門海峡から日本海に出て、日本海上の島々と九州そして本州南西部の中国・北陸あたりを日本海側から望み、その後また淡道嶋に「還る」ついでに、あちこちの数え残した島々を確認するといった、海原を漕ぎ渡る人々(海人)の視点から発した語りの可能性が濃厚に見てとれる。伊予嶋(四国)・筑紫嶋(九州)内の国々を「面」ととらえるのも、あくまで海から眺めた外面の把握で、内陸まで入り込んだ視点ではないからだろう。沖合から波の彼方に眺望する陸地とは、奥行きなどは不明で、ただ大小様々のシマ(大八嶋)

影という以外の何ものでもない。

古事記の記述は、もともとそうしたシマ生み(シマ巡り)の語りであつたものを、おそらく「こもりくの泊瀬の国」(万葉 三三一〇)といった内陸で発祥した言葉クニで、把握し直そうとしたもののように見られる。

一方、日本書紀は、次々に生まれるシマの固有名は古事記とおおよそ同様だが、シマの字には「洲」を当てた。「洲」は「州」とも通い、その字義は、かならずしも海中に浮かぶ島とは限らず、砂の盛り上がった陸地を指し、早くにムラやクニの意にも展開している。そして、

産む時に至るに及びて、先づ淡路洲を以て胞とす。意に快びざる所なり。故、名づけて淡路洲と曰ふ。迺ち大日本豊秋津洲を生む。次に伊予の二名洲を生む。次に筑紫洲を生む。……

と、「大日本豊秋津洲」こそその洲国の中心で、淡路洲はそれが生まれる「胞」であつた(本文・第六書・第九書)との認識も示して、淡路洲の次に(上記および第七書・第八書)、あるいは真つ先に(第一書)それを記している。さらにまた、

対馬嶋・吉岐嶋、及び処々の小嶋は、皆是潮の沫の凝りて成れるものなり。

ともして、海中の単なる小「嶋」と「洲」とは違つと言明して、古事記に見える「処々の小嶋」の具体名などは省略している。また、伊予洲・筑紫洲の四面の内分けも記さないで、古事記にあつた「国」の用法の錯綜は、書紀にはない。書紀の記述は、古事記よりも合理的であるが、「大日本豊秋津洲」を中心とする抽象的な国家観が出ていても、書紀だけを見た場合、古事記が匂わせていた神話の語りの発祥の場（海原）を窺うことなどは難しい。しかし、書紀が、もし国家の神話としてこの洲国産生を語ろうとしたのなら、大和朝廷にとつての聖地「伊勢」などが触れられてもよさそうであるが、それはない。おそらく国家意識以前の、古来の伝承は伝承として、それなりに尊重する姿勢だつたということでもあろうか。

ところで、書紀には唯一古事記が挙げない「越洲」を佐度洲の後に挙げる書（本文・第一・第六・第八）がある。第二・第三・第四・第五は、具体的な洲名を挙げない書だから、第七と第九以外の書紀の主要な典拠はみな「越洲」を記したものだと言つことでもある。古事記の場合、佐度嶋の次に記されているのは「大倭豊秋津嶋」であつた。一つの可能性として、書紀は、それを最初の中心的な位置に移して据えたために、伝承の空白となつた部分を、本来それが指していた佐度洲に面した広大な地域の別名コシで、律儀に補つたことが考えられる。さらにまた、「大倭豊秋津嶋」が指していた海から眺めたシマの地域が、書紀の言つ「越洲」相当だとすると、それは「大倭」は被せない「豊秋津嶋」だけの形が、より古い本来の呼称だつた可能性も見えて

くるだろう。

トヨアキツシマの語の組成は、トヨ・アキ・ツ・シマで、その中核的な意味は、アキが持つている。アキ単独ではアキ（安芸）の国の呼称が、吉備の西域（現、広島県）を指してある。アキとは、右の用字である稔りの季節「秋」以前に、「飽」の字の意が本義に近いと見られる。イザナギ神が穢れたヨミの国から食食のヨモツシコメに追われつつ這々の体で逃げ還つた後の「襖ぎ被へ」で、身につけた諸々の物を投げ棄てて成つた神々の中に、ワツラヒノウシノ神などと並んで、飽昨ノウシノ神の名が見える。止みがたい（困りもの）（食欲の神の意であろう。アキとは食物に満ち足りた状態で、吉備（黍）・粟・小豆といった具体的な穀物名の嶋々と並んで、いわば何でも飽き充ちるほどにある嶋と云つたところであろう。トヨは文字通り豊かさの冠辞ツはノとほぼ同義の助詞的なものだろう。ヤマト民族の伝承では、アキツまでに稲作の祝いの虫「蜻蛉」を思い入れて当て、「うまし国そ蜻蛉」やまとの国は「万葉 二」などとするが、豊秋津嶋は他の嶋々のように豊秋津ノシマと、ノを入れて訓むことがないのは、本来ツがノの働きを持つものだからと見られる。

豊秋津嶋が、佐度嶋や隠伎嶋に向かって広がる、日本海側から眺望される広大なシマ（地域）に対する海人からの呼称だつたとすると、それは、いわば遙かな神話時代におけるその地域の豊かな繁栄を、かろつじて伝え残した言葉だと捉えることができるものだろう。

一 神話期の出雲と「コシ」

国生み神話では、「越」を出すことのなかった古事記は、その後の神話の二箇所で、突然コシの名が出てくる。最初は、よく知られたスサノヲノ命の大蛇退治の所で、高天の原から追放されて降り立つた出雲で、スサノヲが童女を中に置いて泣く老夫・老女に出会い、そのわけを尋ねると、

我が女は、本より八稚女在りしを、是の高志の八俣のヲロチ、年毎に来て喫ひき。今其が来べき時なる故に、泣く。

と、答える所の「高志」で、対応する書紀の記述では、どの書にもその語は見えないもの。今一箇所は、出雲の大国主神に関わる語りが展開した終わりに、五つの名があるとする大国主の一名「八千矛神」としての長い歌語りが添えられる所で、こちらは、伝承全体が書紀には採られていない。

此の八千矛神、高志国の沼河比売を婚はむとして、幸行ましし時、其の沼河比売の家に到りて、歌ひて曰く、

八千矛の 神の命は 八島国 妻枕きかねて 遠々し 高志の、
 国に 賢し女を 在りと聞かして くはし女を 在りと聞
 こして さ婚ひに あり立たし 婚ひに あり通はせ……

これら、二箇所の「高志」は、共に記述にあたり意識的に明示した感じではなく、口承にあつたままに書き残された趣のものである。さてまず、後者にははつきり「高志国」とあるので、これは書紀に記す「越洲」とほぼ同じ所を指すと見てよいものだろう。「沼河比売」の「沼河」は、万葉集卷十三に、

沼、各河の 底なる玉 求めて 得し玉かも 拾ひて 得し玉かも
 も あたらしき 君が 老ゆらく惜しも(三三四七)

とある。「沼名河」であるとも見られている。二十卷本和名抄では、越後国頸城郡の冒頭の郷名に「沼川」が挙げられ、「奴乃加波」と訓が付いている。又ナ河のナは、「水な底・手な心(掌)」と同様のナで、ノと同義である。そして又とは、書紀の「天之瓊矛」に「瓊、玉也、此云、努」と注があるように、「玉」の意の古語(別語)である。古事記にはこれも「天沼矛」と表記されている。奈良の宮廷人などには、又に玉の意の語感を持たない音だったのかも知れないが、「沼河」が又ナカハで、「玉」を得る河であることは、万葉歌から見ても一定よく知られていたであろう。

越後頸城郡の姫川支流の河床から採れる翡翠(玉石)の加工品が、列島広域の古代遺跡から出土して、往古の活発な物流・交易を窺う手掛かりとされることは、よく知られている。近年、日本海沿岸部に近

く、長者ヶ原遺跡・寺地遺跡等の大規模な縄文中後期の玉造り工房跡が発掘されたことで、単に玉石（翡翠）の残る姫川支流というよりも、姫川（糸魚川）流域に、呪物「ヌ（玉）」の交易等によって富を蓄えて栄え、広く勢力を張った部族のいたことが、いつそう現実味を持つて来た。延喜式「神祇十」の越後国五十六座の冒頭に名が出る「奴奈川神社」は、ヌナカヒメノ命を祭神として糸魚川流域に社殿を存続させてもいる。

ところで往古、川にはしばしば川の神女のいたことが、人代になつての記紀・風土記の物語によって、ある程度詳しく知ることができる。

神武天皇の皇后は、古事記の記述によれば、ホトタタライススキ（イスケヨリ）ヒメと言ひ、三輪の大物主神と三島の溝咋の女セヤダタラヒメとの間の「神の御子（巫）」であつた。その家は、「狭井河の上に在り」と言うことで、神武はその狭井河上の「葦原の湿けしき小屋」に出向き妻問ひしたと、古事記は語っている。

狭井河よ 雲たちわたり 畝火山 木の葉騒ぎぬ 風吹かむとす

という歌は、イスケヨリヒメが、神武亡き後の政争の中で、我が子に急を知らせて歌つたものだともされている。神武后イスケヨリヒメとは、いわば狭井河の神女「狭井河姫」でもあつたのである。

あるいはまた、播磨国風土記賀古郡には、景行天皇が、皇后となる印南別嬢に妻問ひしたときの経緯が詳しく語られている。始め、別

嬢は、はるばる野を越え川を渡つて、「誂ひ」してきた景行から逃れ、賀古河の河口の小島、ナヒツマ島（後にいつ高砂）に身を隠していた。別嬢は、在地の大豪族吉備族の姫だと古事記や風土記で言われているが、要するに「賀古河姫」でもあつたと見られる。この、景行の別嬢妻問ひの物語は、どこか八千矛神と沼河姫の場合に似通つてもいる。

川の神女とは、その川の流域を制する土着勢力の神女でもある。それを八千矛神やヤマト政権の王が妻問つたとは、単に神や王の恋物語という以上の象徴的な意味を孕んでもいるだろう。つまり、異なる部族の神（王）と神女との婚姻とは、平和的な部族間の和合とか、より強い勢力への服属とかを暗示して、当然その前段階には、部族間の何らかのせめぎ合いや軋みもあつたと見られるものでもある。なお、因みに、コシの国の川は、ほとんどが信濃国を源流としているが、『先代旧事本紀卷四』で、八千矛神とヌナ河姫との間の一子とされる建御名方神は、信濃のヌハ（諏訪）神社の主祭神である。古事記には、大國主神のいわゆる「国譲り」に先立ち、その子事代主神と御名方神との服従の経緯が語られるが、御名方神が、高天原から派遣された建御雷神に追われて、出雲から「科野国州羽の海に迫めりて」殺されそうになり、その地での蟄居を誓うということになっている（書紀には対応部なし）。古事記の記述だけでは、なぜ「科野国州羽」とこじつけられるのか不明だが、科野は、いわば母方の縁の地だったということだろう。

出雲国風土記嶋根郡美保郷には、

天の下造らしし大神の命、高志の国に坐す時、オキツクシヅノ命のみ子、ヘツクシヅノ命のみ子、奴奈官波比売命に娶ひて産みましし神、ミホススミノ命、是の神坐す。

ともある。いずれにせよ、高志国と出雲国との和合は、神婚による神ながらのことだと、出雲側の伝承ではされていたのである。

出雲国風土記にはまた、神門郡古志郷という郷名が挙がり、

古志郷。即ち、郡家こほりのみやけに属けり。イザナミノ命の時、日淵川ひふちがはを以ちて池を築造りき。その時、古志の国、人等、到来りて堤を為りき。即ち、宿り居し所なり。故、古志と云ふ。

とあって、これも、コシと出雲との密接な関係が窺われる記事である。「イザナミノ命の時」とは、要するに神代の古昔ということだろうが、あえて前後を言えば、八千矛神（出雲の大神）のコシへの妻問以後、治水に長けたコシの人々を連行し、出雲の治水にあたらせた、といったところだろうか。なお、「コシの国側にも「出雲崎」という地名が現存している。命名の謂われや時期は不明だが、これもまた、出雲との関わりの深さを伝えるものであることは確かだろう。

ところで、この章の冒頭に挙げた八俣のヲロチに被せた「高志」は、こちらの出雲の地名の方だろう、というのが大勢の解釈である。しか

し、八俣のヲロチとは、

其の身に蘿ひまわりと檜ひまわりと生ひ、其の長は、谿たに八谷かひ八尾わたに度りて、其の腹を見れば、悉に常に血爛たれたり。

という、明らかに、大雨で立木もろもろの山津波（土石流）が押し寄せ、八方に岐かれた赤茶けた泥が田も吞み込んでしまふイメージがあり、そんなヲロチが、「郡家（郡の役所）に属く」神門川下流域のいわば呑み込まれそうな地域から来るとするのは、あまりに不自然である。書紀中唯一ヲロチの在所に触れる第四書でも、「（スサノヲ）鳥上の峯に到る。時に彼処そこに人を呑む大蛇有り」としている。ここは、岩波新古典大系『古事記』の補注でもいわれるように、やはり「高志」の国に通じるコシで、おそらく出雲の人々にとつてのコシが、大昔（妻問い融和以前）、不意に来襲してくる恐ろしいイメージがあった頃があり、おそらく「コシが来る」と「ヲロチが来る」とは、その不意の来襲の恐怖感の同一性から合体して、「高志の八俣のヲロチ」となったのではなかっただろうか。

出雲国風土記中のコシについては、今一つ、

国引きましし八束水臣津野命、詔りたまひしく、「八雲立つ出雲の国は、狭布まのの稚国わかくになるかも。初国はつくに小さく作らせり。故、作り縫はな」と詔りたまひて、……（意宇郡）

と始まる、いわゆる「国引き」神話で、志羅紀・佐伎・農波・高志、それぞれの「国の余り」を「国来国来と引き来縫」うて国作りをした、という所に出るものがある。この、あちらこちらから端切れを寄せ集めて継ぎ接ぎし、パッチワーク風に国を拡大していったと言つ語り方は、あたかも女の手仕事から来る発想であり、古事記の、海原広く展開した活動的な「国生み」神話とはかなり異なる。出雲を中心に、いわば陸地に立つて見遙かした限りの世界は、シラキからコシまでだという認識でもある。ただ、高志についていえば、それが、出雲にとつて志羅紀（新羅）と同列の、お余りを頂戴するような強大な異国だったことを、よく伝えていると見られるものだろう。記紀の神話は、葦原中国については、出雲地域の先住部族のみに関して詳しいために、日本列島の神話期における出雲の位置が、実際以上に大きく見られている側面もあるように思われる。

三 ヤマト政権とコシ

コシは、日本書紀がもつぱら「越」と表記し、奈良時代までには「越前・越中・越後」と、おそらく統治上の問題から三分割されて、以来今日まで、その表記のみが、音読もされて通用することとなった。書紀は、古事記・出雲国風土記が用いることのなかった「越」を、そもそもどの様な理解で「コシの表記としたのだろうか。

ところで、モロコシというのは、「昔、日本で中国をさして呼んだ名称／中国から伝来した事物に冠しても用いた」（小学館日本国語大辞典）と言つたあたりが大方の理解である。語源については、漢語「諸越」の訓読から出来た語かとする江戸期からの説を、現行のほとんどの辞書類が語釈の始めに挙げている。「諸越」は、中国の春秋戦国時代の「越」を指し、現在の浙江省あたりのその地域と、往古交通が盛んだつたため、その地方の呼称が受け継がれて唐のことにもなり、さらに中国全土のこととなった、といった注解を載せる辞書も多い。しかし、春秋戦国時代と言えば、はるか紀元前で、日本列島では弥生時代初期以前（いわば神話期）にあたり、模糊とした無文字時代である。その時代に「諸・越」と分けてモロ・コシと訓を当てた、あるいは、彼の地の「越」が、日本語のコシ（動詞的な訓である）、後述（に対応する等の認識がなされていたというのは、理解に苦しむ無理な説ではないだろうか。しかも、『莊子』等に見える「諸越」の「諸」とは、「諸は於、発語の辞」（大漢和辞典）、「諸は接頭辞」（大漢語林）等とも言われ、常にその形で用いられるわけではない。あるいは、「諸越」とは「百越（沢山の小国からなる越族の意）」と同意とする説も見られるが、そう理解してよい根拠が示されているわけでもない。

また、彼の地の文字（漢字）で示された国や民族の呼称を、此の地でいわば「訓読」する場合、倭はヤマト、韓・唐はカラ、高麗は「マ、蝦夷はエミシ」と言つように、ほぼ同じ指示と見られる呼称を訓に当てるのが一般で、個々の文字毎に訓読し、それが広く通用したと言つ

のも妙である。モロコシが「諸越」という表記に付く文献例は、室町時代の易林本節用集あたりからであり、奈良時代以前の文献のモロコシは、もっぱら「唐・唐国・大唐」をそう訓んでいて、「諸越」は出ない。節用集諸本も易林本以外では、「唐・大唐(国)」のみで、易林本も「大唐国」と並記している。

さてそこで、あらためてモロコシとはなぜそう言ったのか、また、それが何かこの列島のコシ(越)の国の呼称と意味的に関係があるのか、と言ったことは、なお、別の用例からの検討が必要であろう。

御間城天皇(崇神)の世に、額に角有る人(加羅国の王子)、一の船に乗りて、越国(越)の国に到れり。漂ひ溺るるに苦しむるに、嶋浦に留連(とどま)り、北海より廻りて、出雲国を経て此間(こゝ)に至れり。(垂仁紀二年、一五)

高麗(こま) 路に迷ひて、始めて越の岸に到れり。漂ひ溺るるに苦しむるに、尚性命を全くす。(欽明紀三十一年四月)

高麗の使人、越の海の岸に泊まる。船破れて溺れ死ぬる者衆(おほ)し。

(敏達紀二年五月)

秋七月、高麗(こま)の路(みち)より、使を遣(ま)して調進(たてまつ)る。風浪高し。故、帰ること得ず。(天智紀七年七月)

これらの記事は、古来、朝鮮半島と日本列島との交通が、主に日本海側の出雲から北陸(福井・石川)のあたりで行われていたことを伝

えている。人も物(調)も、風波に任せ辛うじて漂い着く先がコシの岸で、そのあたりの海がコシの海、その航路がコシの路と単純に呼ばれていたと言つことだろ。一般に耳からの音のみで捉える他国の呼称の意味などは、自らの語感で半ば勝手に意味づけして納得もするというのが素朴なありようでもあって、右のような文脈でのコシとは、人や物がはるばるやってくる意の「来し・越し」の地といったあたりの感覚で、漠然と捉えられもしたろ。

国の呼称を、ある程度意味を踏まえながら表記する場合、「越」のよつに、動詞の名詞形一字という例は他にはない。一般に、古い地名の表記は、意味が判然としなければ、「安芸・奈良・伊勢・肥」等と仮名に近い表記が採られている。コシについても、古事記(垂仁)では「尾張・科野」等と並記されてもいる。「高志」の表記を、一般化させる可能性もあつたであらう。しかし、あえて異例の表記「越」を公の表記としたところには、「越」の意味にかなり確信があつたが、大和政権においてそれは服属しなかつた「高志」の、その好字の意味を嫌つたことなども、あるいはあつたかも知れない。

「越し」の動詞的な一般の用法は、

大坂に 継ぎ登れる 石群を 手(て)ごしに、こさは こしかてむかも

(崇神紀十年 歌謡)

山越(やま)しの風を時じみ寝る夜落ちず(万葉 六)

瀬(せ)を早(はや)み堰越(せき)す浪の音の清けく(同 一一〇八)

といったもので、「手越に越さば越しかてむ」とは、手渡しに渡せば運んで来られるだろうの意、「越し」とは、空間的な渡来・運搬をいう動詞である。また、「持ちコス・取りコス・見コス・繰りコス」等の複合動詞では、時間的に将来に「渡る」意ともなっている。先の出雲国での用法「高志の八俣のヲロチ（堤を作った）古志の国人」等でも、あるいは漠然と遠くから「来し」（シには、師や子や氏の字が当てられて意味が曖昧になったが、古く「人」の意もある。大人・土師^しや、人称代名詞他称のシなど）といった意味を感じていた可能性もある。遠くて現実感のないコシが実感を伴って意識されるのは、そうした遠来の人や物だったために、渡って来る意の「越」が同音で結びついた可能性は大きいだろう。

モロコシもまた、渡来して来る諸々の人や物以外には実感の乏しい、遠い彼方の大陸を漠然と指していた（「諸来し」の意とするのは、江戸期にもある一語源説）のではないだろうか。

その年来たりけるもろこし船の、わうけいといふ人のもとに文を書きて、火鼠の皮といふなる物買ひておこせよとて（竹取物語）
思ほえず袖にみなどの騒ぐかな もろこし船の寄りしばかりに
（伊勢物語二六段）

などに見える「もろこし船」にも、珍しい物を種々載せて来航する大

船のイメージが強く出ている。なお、動詞にモロ（諸）を被せて「諸々総べて」の意とする古例には、「モロ拳げ」（神楽歌の曲目）、「草はモロ向き」（万葉 三三七七）などが残る。

奈良時代の大和朝廷の人々にとつては、モロコシ（諸来し）は、当然大唐国で、

秋七月……大礼小野臣妹子を大唐に遣はず。（推古紀十五年）

と、実際は隋であつても書紀にはそれで記され、万葉集でも、

勅旨 戴き持ちて 唐の 遠き境に 遣はされ……（八九四）

と、歌言葉に自然に馴染んで詠まれるような、訓読語などではなく、古来、大陸の大国を漠然と指して来た「和語」だったのである。

ところで、万葉集の歌言葉と言えば、コシについては、

み雪降る越の大山行き過ぎて 何れの日にか我が里を見む（三一五三）

大君の 遠の朝廷と み雪降る 越と名に負へる 天さかる 鄙
にしあれば 山高み 河遠しろし……（四〇一一）

あしひきの 山坂越えて 行き更はる 年の緒長く 科坂在る故

志にし住めば……(四一五四)

しなざかる越に五年住み住みて 立ち別れまく惜しき宵かも(四二五〇)

故之の海の信濃の浜を行き暮らし 長き春日も忘れて思へや(四二一〇)

等、越中守大伴家持に関わるものが大部分で、狭義では主に越中国内
が意識されて歌われたものである。「コシの海」も、右の歌では先に
書紀の例で見た越前あたりではなく、富山県沿いの海である。注目さ
れるのは、国名として詠む場合、「み雪降る」を冠するか(右の他、
四二二三)、「しなさ(ざ)かる」を冠するか(右の他、三九六九・四
〇七一・四二二〇)という枕のつく歌われ方がほとんどだという点で
ある。「み雪」はおそらく、「深雪」で、「み雪降る」コシ」とは、雪深い
越と言う、よく分かる枕である。他方、「しなさかる」とは、

「しな」は、階段で坂の意。「さかる」は、遠く離れる意。多く
の坂を越えて、遠くにある「越の国(越中)」「の意で「越」にか
かる。また、「しな」は上下級の意で、都を高く地方を低くする
意識から上下遠く離れている「越」にかかるともいう。(阿部万
蔵・阿部猛『枕詞辞典』高科書店)

というあたりが、ほぼ従来の諸説をまとめた解釈である。「天離ル鄙・
鄙離ル国などにならって生まれた新語である。」(小学館日本古典文
学全集『万葉集』(4)頭注)などとも言われる。もっぱら大伴家持関連

の歌のみに見えるので、越中の国での家持の認識を踏まえた造語であ
る可能性もある。とすれば、右に挙げた、四一五四番歌の唯一仮名書
きではない用字「科坂在る」が、少なくとも造語者の本意であると見
ることもできるのではないか。

また、一般に枕詞とは、「み雪降る」に端的でもあるように、直接
掛かる語との間だけで意味を成立させているもので、その意味が、歌
全体の意味や感慨と関わるものではない。たとえば次の歌で、傍点を
付した地名にかかる枕が、歌全体の意味に関わり成立しているなどと
は、とても見られないものだろう。

つぎねが、山城川を 宮上り 我が上れば あをによし、奈良を過
ぎをだて、大和を過ぎ 我が見がほし国は 葛城高宮 我家の
あたり(仁徳紀 歌謡)

「多くの坂を越えて、遠くにある」とか、「上(都)下(鄙)遠く離
れている」とかの意は、「あしひきの 山坂越えて」(四一五四)「天
ざかる 鄙にしあれば」(四〇一一)等々の歌全体の表現や感懐を移
入したとらえ方で、「しなさかる」をむしる枕詞とは見なさない平板
な解釈ということにもなる。

「しなさかる(科坂在る)」とは、文字通り単純に「段坂のある」地
勢(万葉集にも出る砺波平野あたりの景観か。「砺波」とは、研ぐに
つれ波状紋が重なり広がる砥石の研ぎ水)を捉えて「コシの枕となつて

いるものだろう。「雪深いコシ・段坂のあるコシ」といつ、「コシを見知らない京人にも伝わる（いわば風土記的な関心にも通じた）客観性こそが、枕詞の、時間空間的な隔たりを超えるメッセージ機能でもある。それがまた、歌の中では、全体の歌意に重層した意味を成立させ、イメージを膨らませる働きも持ちこたうのである。

さて、人代になってからの「越」に関わる情報は、崇神天皇の時代、いわゆる四道將軍の一人大彦命を北陸（古事記では高志）に派遣して、「マツロハ又人等を和平」せしめた由（記）であるが、その後、

是に、日本武尊の曰はく、「蝦夷の凶しき首、咸に其の幸に伏ひぬ。唯信濃国・越国のみ、頗る未だ化に従はず」とのたまふ。（景行紀四十年是歳）

ともなされて、以後、奈良時代に至つてようやく分割統治されるまで、大和政権にとって、いわば志高くてなかなか御しがたい勢力であったようである。コシの国人と蝦夷と言われる人々との交錯はよく分らないが、

陸奥・越後の二国の蝦夷、野心ありて馴れ難く、屢良民を害す。

（続日本紀 元明紀和銅二年）

として、「征越後蝦夷將軍」が遣わされたりしたのは、家持が越中守

として赴任する三十数年前のことでもあった。

四 「コシの本義

神話期のこととして語られる古事記や出雲国風土記に見えるコシは、それが、高志や越の漢字を当てられる段階以前、声のみの呼称として古くから成立していたことを十分窺わせるものだろう。

一般に、古い国の名とは、単純な音であっても、国びとすべてが、安心して生きてゆける豊かなよい地であると言ったあたりの呪言的な意味合い（いわゆる言霊）が込められているように見える。たとえば、コシと同様に大和政権によつて分割統治された、備前・備中・備後のもとは大國「吉備（きび）」であるが、豊かな食の国の意だとみられるし、豊前・豊後のもとには、豊かさそのことを指す「豊の国」であった。また、それらよりも昔（仁徳の頃とも）に上下に分かれたと見られる上野と下野とは「ケ野」がもとで、そのケとは「木」かとする説もあるが、むしろ保食神「オホケ（大食）ツヒメ」や「御食つ國」などの「食」ではなかったかとも思われる。本義に関わる部分は早々と抹消した強引な文字の当て方で、さらに、「コウツケ・シモツケなどと音が変化しては、もはや本義を知るすべもない。

コシは、しかし、直接食の豊かさをいう右のような場合とは、少し異なるものように見られる。「恐らく夷語、即ちアイヌ語の類にて、古代コシといふ一種族の在りければ」と説くのは、越出身の地名学者

吉田東伍『増補大日本地名辞書』富山房)であるが、仮にそうだと
して、ではその「コシ」の意味は如何かとの問題は、解かれているわけ
ではない。先の「カミツケノ(上ツケ野)」「はコシの隣国、共に大和政
権に対抗した頃もあつたシナノ(科野・信濃)もまた隣国で、これら
についてはそれなりに語意を探れる手掛かりも古文獻等にないわけ
はない。「コシ」についても、狭義のヤマト言葉ではなかつたにしても、
何らかの手掛かりが文字の上に残っているのではないだろうか。

「しなさがる」のシナの意を「階段」とか上下「級」とかに解する
際の根拠とされる例の一つに、新撰字鏡(天治本)の次の記事がある。

層 子恒反 重居也 重也 累也 級也
重屋高也 志奈又己志也

シナは、「弓といへばシナなきものを」(神楽歌)「級しなてる片足羽河
の」(万葉)等の歌に出る例もあつて、「級」の意を持つことは明らか
であるが、「こ」で注目されるのは、「二行目の」重屋高也、志奈又己志、
とあるところである。シナと「コシ」とは同義だと言つことだろうか。

「コ」は、いわゆる上代特殊仮名遣いの甲・乙の別がある首で、これま
でみた「コシ」の国の表記「高志・古志」も、動詞「越」の「コ」も甲
類である。ところが右の「己志」は乙類で、新撰字鏡は「コ」について
は主に古(甲)と「己」(乙)との仮名で書き分けを残しているとも見ら
れている。それに因つていつなら、右の「己志」と「高志」の国とは
関係の薄い別語といふことになるのだから。しかし、特殊仮名の別は、

私見では、大和朝廷の主に男声が意識的に書き分けた可能性が考えら
れ(小著『古層日本語の融合構造』平凡社)、そうでなければ、たか
だか百年余り後の平安期和歌(奈良朝からの伝承歌も含まれる)やか
な文に何の痕跡も残らないわけが理解できない。万葉集等の書き分け
によれば、「コ」は、乙類の方が明らかに主要な優勢音で、甲類は、「子・
小」の意の関連語と、用言「恋・越」あたりの用字に限られた、いわ
ば劣勢音である。国名「コシ」の現地音がどのような発音であつたにせよ、
京の文書では劣音として表記した可能性は、越国統治に手を焼いた大
和政権側としては、あり得ることではないだろうか。

さて、「志奈」と「己志」は、共に「層・重・級」あたりの同義で
あるという見解は、「コシ」の仮名の問題を無視すれば、すこぶる注目に
値する。前章に引いた、大伴家持の越中国での、「コシ」の海の信濃志奈也
の浜を行き暮らし(四〇二〇)という歌からも、「シナ野」は、単な
る「浜名」に固定する以前は、「コシ」と同様なる種の地形・地勢を指
しての名だつたことは、容易に推察できる。もしかしたら、国名のシ
ナ(野)と「コシ」とは、類似の地形(階段状の丘陵や扇状地)に対する、
それぞれの地域独自の呼称だつたといつのかも知れない。

ところで、新撰字鏡享和本では、「己志」が「塔之己志」とされて
いる。これは、和名抄でも同様に「層」の項に「太布乃古之」と和訓
が出るもので、次のような用例を持つものである。

西大寺の八角の塔を四角に成し、七層しちを五層に減しき。(靈異記下

三十六「塔の階を減し、寺の幢を休して、悪報を得る縁」

〔訓注〕層かさね

靈異記も和名抄も「は古（甲類）」

（薬師寺）宝塔二基、各三重、有二裳層一、（扶桑略記 天武九年十一月）

（近江の古寺）金堂八瓦ヲ以テ葺ケリ。二階ニシテ裳層ヲ造リタリ。（今昔物語 卷十一 第廿八）

「裳層」とは、モコシで、現存の建物では、大和薬師寺の三重の塔の各階に庇風に付いて六重に見えるものがよく知られているが、法隆寺の金堂・五重塔の初層などにも見られるものである。右の記事等からしても、初期寺院建築では備えるものが多かったようだが、ない場合もあるということとは、建築構造上必須のものというわけではなく、例えば葺の鳴尾なりのびや鯨矛ししやちぼうのような、呪物であった可能性もあるものだろう。

「裳層」は、建築史などでも、日本の木造寺院建築に独特の、古くからあった技法と見られているが、古代の木造建築は寺院以外では礎石や柱穴しか残っていないので、その出自等は皆目判からない。ただ、古文獻に散見される「高宮・高殿・高屋」という言葉、また新撰字鏡の「重屋高也」、あるいは

この殿は うべも富みけり さきくさの 三つ葉四つ葉の中に
殿造りせり（催馬楽 幾重にも芽くむ山ゆりの葉のイメージか）

という古来の伝承歌などからも、寺院建築以前に高層階の建物があったことが窺われ、その「たくみ（工法）」の熟練が寺院建築に応用された可能性も考えられないだろうか。奈良の京を、平城宮（平屋造り）と字を宛てた意味も、併せて考えてみることも知れない。

さて、「裳層」の「裳」とは、古代、女子が成人式以後に腰に纏う衣服のことで、多分に呪的・儀礼的な意味を持っている。したがって、単なる「層」でなく、「裳層」と呼ぶことには、コシだけでは伝わりにくい呪的な莊嚴の意味を明確にしたものでもあるだろう。建築仕様としてのコシは、法隆寺金堂等の初層のみでありようが元かと思われるが、諸国から集められたタクミ（大工）達によって、神聖な建物の威風を整えるための当然の仕様として伝えられた可能性もあるのではないかと思われる。

春先、越の国の景観を望むと、雪に白く覆われて聳える奥山と、手前に広がる雪のないならかな端山（外山）との対照が大変印象的である。白き山々とは、

……すめ神の 領しはきいます 新河の その立山に 常夏に
雪降りしきて ……（万葉 四〇〇〇 立山賦 家持）
弥彦あなに神さび 青雲のたなびくひすらこさめそほ降る
弥彦神の麓に今日らもか 鹿の伏すらむ皮服着て 角突きながら

(同 三八八三 一云・三八八四)

といった神の峯々である。そして、その麓に、神の山を戴きながら広がり伏す丘陵地、それが「コシ」というのではないだろうか。そうした風土の姿さながらに、神（仏）や族長の領する「み屋」に「コシ」が荘厳されたのではなかったかと想像される。なお、『日本方言大辞典』（小学館）によると、「コシ」を、「山の頂・尾根」（八丈島・福島・長野・鹿児島の一部地域）・海岸などの崖・急な傾斜地」（八丈島・大島・利島）などとする場合が見え、「山腹」（八丈島・長崎の一部）や「山麓」（長野の一部）をいう場合、「腰」だとされているが、もあつた由で、いずれも一定の地勢に関わる意味合いである。

「コシ」が、ある種の地勢を捉えての呼称と見なされることは、先にも触れた出雲国風土記の「国引き」神話の中に、

志羅紀の三埼を……………国来国来と引き来縫へる国は、去豆の折絶より八穂爾支豆支の御埼なり。此くて、堅め立てし加志は、石見の国と出雲の国との境なる、名は佐比売山、是なり。……………高志の都都の三埼を、……………引き来縫へる国は、三穂の埼なり。持ち引ける綱は、夜見の嶋なり。固め立てし加志は、伯耆の国なる火神岳、是なり。

と出る「カシ（加志）」との関わりからも考えられる。カシとは、後

世は船を繫ぐ川岸とか魚河岸とかを言うが、単なる自然のままの岸辺でなく、「固め立てた（固く造成した）」岸壁風のところである。右の語りで、御埼（神埼）に対する神の山をカシだと言っており、カシにもまたその昔何らかの神聖な意味合いがあつたかと思われる。

「コシ」を、右のようなカシや、さらにキシ（岸）とも並べて見ると、それらの音の相通が、地勢的でありよつた相通に加えて、人々が神の恵みを受けながら安住できる地という、古い古い呪的な意味の相通があつたことが、はるかに響いてくるのではないだろうか。

「コシ」とは、そのような意味で、白き神々の峯を戴く在地の人々の、誇らかな国名であつたのである。

The name of Koshi, an old land in Japan

Noriko Kimura